

興亞觀音のいわれ

—殉國七士の碑があるわけ—

興亞觀音住職 本修院道場主

伊丹 忍礼 述

【本文】

◆興亞觀音について

|| 興亞觀音はどうして建立されたか ||

本修院道場主 伊丹 忍礼

昭和十五年（一九四一）の二月二十四日、觀音菩薩像のご開眼式が、願主たる松井石根大将をはじめとして、朝野の名士、戦没遺族の多数の参列のもとに、いとも厳肅、かつ盛大に挙行されました。これが「興亞觀音」のはじまりであります。

では、どうしてこの觀音が建立されたか、それは願主たる松井石根大将に聞いてみましょう。

『支那事變は友隣相撲ちて莫大の生命を喪滅す實に千載の悲慘事なり。然りと雖、是所謂東亞民族救済の聖戰たり。惟ふに此の犠牲たるや身を殺して大慈を布く無畏の勇、慈悲の行、真に興亞の礎たらんとする意に出でたるものなり。予大命を拝して江南の地に転戦し、亡ふ所の生靈算なし。洵に痛惜の至りに堪へず。茲に此等の靈を弔ふ為に、被我の戦地に染みたる江南地方各戦場の土を獲り、施無畏者慈眼視衆生の觀音菩薩の像を建立し、此の功德を以つて永く怨親平等に回向し、諸人と俱に彼の觀音力を念じ、東亞の大光明を仰がんことを祈る。』

というのであります。

おもうに昭和六年九月十八日の満州事變勃發、それにつづいて昭和七年一月二十八日の第一次上海事變、さらに昭和十二年七月七日の日支事變の勃發と、日本は悲劇の運命を辿つてゆきましたが、支那大陸出征する將兵そのものは、ひたすら日本国家のため、東亞諸民族の共榮のため、そして新秩序建設「聖戰」の理念のもとに、その生命をすてたのでした。

松井石根大将は上海方面郡最高指揮官として昭和十二年八月中旬出征されたが、大場鎮並に南京に日本軍・彼我幾萬の將兵の血潮が散つた。

累々たる死屍、滾々たる流血、啾々たる鬼哭、げにや戦場一握の塵土、一塊の土石にも、万斛の思念の遺恨をやどしています。即ち松井将軍指揮のもと、もつとも戦闘の激しかった大場鎮・南京の血土、肉壤を運び来て、観音像を造り、彼我戦没の英靈の冥福をいのることをば、將軍は念願されたのであります。

そこで將軍は愛知県常滑市の有名なる佛像陶工師たる柴山清風氏にはかり、さらに帝展審査員小倉右一郎氏のもとに、観音像の完璧を期された。かくて成就されたものが、今日、堂側に露座にまします、高さ一丈の合掌印の観音像であります。

徳孤ならず、必ず隣ありとか、ここに瀬戸市の旧家で陶工師の加藤春二氏は、一人息子が日支事変で戦死されたこととて、深く松井大将の念願に共鳴され、前記の合掌印の観音像と同じ姿のものを二尺に謹作され、此れをば堂内中央に安置することになりました。

そしてこの興亜観音の本堂は、これまた不思議な縁によるもので、名古屋市中村区の魚沢弘吉氏は、社寺建築の専門の頭領で有りますが、熱田神宮の神殿造営の余材を保存していられたが、これを寄進されて、自ら堂宇の設計建立の任にあたられました。堂内祭壇には、

右 —— 日本国戦死者靈牌

中央 —— 観音菩薩・松井將軍部下戦死靈名
左 —— 中華民国戦死者靈牌

が祭祀されています。

松井將軍のもとに一命を戦火にささげられた二万三千一百四柱の靈名は、宝篋におさめられて、観音菩薩尊像のもとに、永遠にやすらかな光明につつまれ、朝夕、妙法の回向供養のもとに冥福を祈念されてあります。

そして、それは単に、松井將軍の部下、二万三千一百四柱の戦死者だけでなく、左側の中華民国戦死者、右側の日本国民戦死者も怨親平等に回向供養されているのであります。

この本堂の天井は、岡谷惣助氏寄進の木曽檜をもつて張られ、堂本印象画伯の力作たる天龍が描かれ

てあります。

そしてこの土地は興亜観音奉讃会理事長たる濱々園主の古島安一氏の熱誠寄進にかかり、休憩の家は名古屋材木行組合の義納によるもの、全山」といとく松井大将の悲願への共鳴讃同の浄志でないものはありません。一草一木の微にいたるまで、彼我戦没の英靈の冥福をいのつています。

◆なぜ観音菩薩をおまつりしたか・?

観音菩薩ほど日本国民一般に親しまれている菩薩はありません。これは日本だけではなくインド・支那でも、古代より一般に信仰せられてまいり、わが日本では、佛教渡来の推古朝よりこのかた、一般に普及してまいりました。

それだけに、各国各地の土俗習慣に混入して、種々の観音をうむにいたりました。水月・一葉・瀧見・

岩戸・阿耨・魚藍などの観音は、経文ではなく、俗傳の信仰によつて建立されたものであります。

眞言密部で有名なのは、聖観音・十一面観音・千手観音・如意輪・馬頭・准胝・不空けん索などの

七觀音があり、そのほかにも沢山あります。

淨土では阿弥陀如来の脇士として、觀音・勢至の二菩薩があることは、誰しらぬ者のないところです。

このように、さまざまに観音菩薩がありますのは、佛教に説かれた菩薩の中では、ただひとり観音菩薩にかぎりますが、これは、どういう訳でしようか。それこそ「觀音經」そのものに原因があるのであります。

観音經リ それは妙法蓮華經の二十八品のなかの第二十五品の「觀世音菩薩普門品第廿五」が、これが世にいう「觀音經」であります。観音菩薩が普及しましたのは、まさしく法華經の觀音經によります。観音とは畧称で、正しくは「觀世音」であり、インドの言葉でいえば「アバロキテイシユバラ」であります、旧訳では觀世音・光世音・觀世自在・觀世音自在となつていて、觀音・觀世音が一般にもちい

られています。新訳では觀自在となっています。この菩薩をどうして「觀世品」と名づけるのでしょうか。それは

『もし無量百千萬億の衆生有りて、諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて、一心に名を称せば、觀世音菩薩、即時に其の音声を觀じて、皆、解脱することを得しめん』と説かれてあるように、「世音」を「觀じて」、それに応じて救済される菩薩だからです。その救済の具体的な内容は十二ヶ条

あり

- 一、火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難の七難。
- 二、貪欲・愚痴・瞋恚の三毒。
- 三、善男、善女をもとめる二求両眼。

となっています。

そして、以上の十二ヶ条の救済をせられる時のすがたは、必ずしも佛、菩薩、諸天の姿だけではないに、さまざまの「三十二身」を現じて救済せられる、時には天龍、夜叉、鬼神のすがた、動物の形、童男・童女の身をも現ぜられると説かれてあります。

そして、経文の御文章が素晴らしい、拝讀していきますと、今にも菩薩が種々の身を化現して、私どもの苦難をすくい、求願をみたして下さるような気分にさせられます。

その経文の中に『この觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏急難の中に於て、能く無畏を施す。この故に、この

娑婆世界に、皆これを号して施無畏者となす』の一文があります。

この無畏、施無畏、施無畏者は非常に有名な経文であります、

- 一、苦難迫害の畏しいことを無くしてしまう。
- 二、畏しいとおもう心を無くしてしまう。

の両 ふたつ の意味があります。

さてこの慈悲広大にして神力自在なる觀世音菩薩に、觀音經をうけたまわった人々は、無尽意菩薩と
いうお方が代表として、種々の宝珠で出来た瓔珞ようらくを供養に捧げますと、不思議にもお受けになりません。
いくらお願ひしても受けられません。

すると釈迦牟尼佛は『供養をしようとする人々を愍あはれむが故に、受けてやりなさい』と仰せられました。釈迦牟尼世尊のおすすめです。どうして仰せに順はずにいられましょう。

『即時に觀世音菩薩、諸の四衆、及び天龍人非人等を愍みて、其の瓔珞を受け、分ちて二分なと作し、
一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉る』
と、經文にとかれてあります。

即ち一度受けた供養を次には二つに分ち、釋迦佛と多寶佛とに奉げてしまわれるのであります。
これは一体、何を物語るものでしようか。

これこそ、觀世音菩薩の施無畏の大慈悲と大神通とは、みな」と「本師釋尊」にもどづく」と
を示されたものです。

觀世音菩薩が、十界の衆生の願求切望する世音を観じて、適切に三十三身を現じ、無畏を施す自在神通は、これを佛教の術語で「普現色身三昧」と申します。それを教義で申しますと、十界互具・一念三千の道理をば、不借身命の信仰で「体達」したから、そういう自在神通をそなえるようになられたのです。

その一念三千、不借身命は、法華經の如來壽量品で、本佛釋尊によつて教はることが出来たのであります。もとづくところは如來壽量品です。それを觀世音菩薩は身を以つて示教されました。

日支事変も大東亜戦争も、もうすべて過去のものとなってしまいました。しかし、幾百千萬の戦没精靈の念慮はのこっています。目をつぶって考えますと、阿鼻叫喚、屍山血河、その啾々たる戦夜の雨に、亡魂は何を念じているでしょう。一言にしていえば、共存共榮・世界平和です。これ以外に何もない筈です。

日支事変も大東亜戦も、彼我の立場を異にしていましたが、目的としたところは、共存共榮・世界平和でありました。当時の日本は、日本の秩序を東亜にしくことによつて、それを達成しようとして、米英は米英の秩序において、それを実現しようとして、ここに不幸にも戦火砲煙を見るに至つたものです。勝敗を別にして、日本が正しかつたか、米英が正しかつたか、それは、今、直ちに結論を出すわけに行きません。今後百年の日月を経たら、世界の歴史が証明してくれるでしょう。

ただ、現前の事實は、大東亜戦は日本の完敗となりましたが、その戦争目的であつた東亜諸国の独立が達成されて、久しい西欧の植民地支配から脱がれることが出来たことです。

もし大東亜戦がなかつたらどうだつたでしよう。ベトナムもラオスも、カンボジアもタイも、ビルマ連邦、マレーシア連邦、インド共和国も、そしてインドネシアもすべて皆、西欧諸国の壓制支配のもとに苦惱呻吟を今日でも続けていたことでしょう。東亜諸民族の独立、白人支配よりの解放、それこそ明治以降の日本の国是であり、日本の世界にもとめた「新秩序」であり、大東亜戦争であり、その大東亜戦の序戦としての日支事変でありました事は、何人も知るところです。

大東亜戦はもとより、日支事変の戦没の英靈は彼我ともに、生命を東亜諸民族の開放と独立とにささげ、東亜諸民族に「無畏」を「施した」ものであります。

大悲觀世音摩訶菩薩「その大慈大悲の慈眼視衆生と、自在神通力をもつて、東亜の諸民族から西欧諸国の植民支配、壓制搾取の「畏れ」を「無からしめた」」ものです。

げにや「興亞觀音」の祭祀、かくして日華両国の戦没英靈も、その戦火の犠牲者の精靈も、もつて冥するをうるでしよう。

もとより松井石根大将は、軍人であつて佛教の協議は、その専門とするところではありません。

ただ、日支事変の劈頭において、彼我激闘の慘境を目賄して、且つ部下二萬三千一百四人の戦死をおもい、その遺族の心事をしのび、さらにまた中華民国のそれをも考えて、慈愍哀憐やるかた無く、その追福回向のため、観音像建立の願主となられたものです。

勿論、この「興亜観音」の祭祀は佛教的ではありますが、厳密な意味では倫理的祭祀であります。それでよいでしょう。なぜなら、二萬三千一百四人の戦死者ならびにその家族には、各種各様の宗教があつて、宗教的統一是不可能だからであります。

本堂内の中央には観音立像、二萬三千一百四靈名、左右の日華両国戦没者靈牌、これは芝の増上寺の大島徹水僧正の指導ですが、これまた宗派心をこえた良図であります。

熱海市伊豆山の鳴沢山、風光すこぶる明媚、山腹二〇〇メートルに、熱海駅より一キロばかり、バスで十分、交通至便のわりに閑寂、そこに松井将軍麾下の二萬三千一百四名の戦没英靈は、とこしえに施無畏者、慈眼視衆生の大誓願のもとにねむる。

願主たる松井石根大将も、昭和二十三年十二月二十三日、有名な七戦犯として刑死され、その遺骨が興亜観音のもとに埋葬されています。能願、所願ともに怨親平等、世界平和、施無畏者の大慈願をもつて、日本ならびに東亜と世界の運命展開をみていられることでしょう。

◆殉國七士の墓、興亜観音にその墓のあるわけ

東京裁判（極東国際軍事裁判）は、昭和二十三年十一月二一日午後三時五十分、A級戦犯者判決をくだしました。

絞首刑としては、東條英機、松井石根、土肥原賢二、広田弘毅、板垣征四郎、木村兵太郎、武藤章の七人がありました。

そして死刑はよく十二月の一十三日午前零時二十分、第一組は土肥原、松井、東條、武藤の四氏が最初に執行され、ついで第二組の板垣、広田、木村の三氏が執行せられた。

七士の遺骸は、刑の執行後一時間半をへた午前二時五分、一台の大型トラックで、巣鴨拘置所を運び出され、横浜市営の久保山火葬場で、米軍監視下に午前八時十分から火葬開始、九時三十分に終了した。

遺骨は遺族より引取りの請求があつたが、占領軍はゆるさなかつた。その理由は国民の一部が英雄あつかいをして、神聖視することをきらつたからでした。その上占領軍は、ドイツ戦犯のゲーリングの場合のように、飛行機で空中に遺骨を撒き散らす予定であつたようです。ところが、占領軍がそれを行つたことは聞いていません。

進駐軍総司令部からは、太平洋にすてさつたと公表されました。果たしてそうなのか……？
遺骨はどうなつたのか……？

太平洋にすてたはずの遺骨が、おかしなことに、昭和三十年四月廿四日、進駐軍の命令により、厚生省引揚援護局の市ヶ谷庁舎で、七戦犯の遺骨と称して、白木の箱にはいつたものを渡された。

広田弘毅氏の遺族のみは受取をこばまれたが、他はそれを受けとられた。

果たして、それが真の遺骨か（？）どうか、証明する途がありません。ただし、ここに七士の、遺骨に絶対間違いないものが、興亜観音の境内の「七士の碑」のもとにあります。
どうして、七士の真の遺骨が興亜観音の境内にあるのでしょうか。

◆火葬場より遺骨を取り戻して

昭和二十三年十二月二十三日の米軍による久保山火葬場の火葬は、どうしたわけか、火葬が完全にゆかなかつた。即ち燃焼がうまく行かず、いわゆる「半焼」「生焼」のような状態でした。

おもうにこれは、米軍兵士は日本の火葬機械の加減に慣れていないので、うまく行かなかつたのでしよう。そこで米軍の兵士は、当時の火葬場長であった飛田美善氏を呼び、再火葬を命じました。この飛田氏に再火葬を命じたことが、七士の間違いない遺骨が日本人の手にはいる根本原因となつたわけです。

話は別になりますが……、東京裁判の弁護人であつた三文字正平氏、おなじく林逸郎氏は、はやく

も進駐軍の意図するところを見ぬき、七士の遺骨が、飛行機で空中などにばらまかれたりしてはたまらない、叮重に埋葬すべきであると考え、遺骨を取り戻す計画をたてました。

東京裁判の弁護人という立場から、事前に七士の火葬が久保山火葬場でおこなわれることを察知して、三文字士は飛田火葬場長、ならびに火葬場のすぐ隣りの禪宗の、興禪寺住職市川伊雄師と、遺骨の搬出についての事前の打合せをおこなつていきました。

さて、飛田氏による再火葬が無事すんで、七士の遺骨を各別にそろえて、線香をともし、合掌しつつ、それぞれの御骨の幾箇かづつを、隠匿しようとした刹那に、米軍兵士が線香のにおいに気付いて、どやどやとはいつてきて、七士それぞれに区別して置いた遺骨をば、まるで、マージヤンのパイを混ぜるよう、「ごちやごちや」に一つにしてしまつた。そして、それを黒塗りの箱に収めていづれかに持ち去つてしまつた。

ところが、その七士の遺骨を黒塗りの箱に納れる時、納れかたが粗雑だったので、中小骨・細骨・骨灰……、ちょうど合計して大人の骨壺一箇分ぐらいのものを、「塵灰」のごとくコンクリート穴に捨てたのであります。

久保山火葬場は、勿論、米軍占領下にあり、三文字、飛田、市川の三氏は十二月廿六日の夜半、黒マントをかぶり、厳重な警戒網を突破して、コンクリート穴にしのび寄り、懷中電灯を点滅しつつ、竹竿の先に罐などをつけ、苦心惨憺、息をころしつつ、とうとう全部をスーツケースにおさめて、一旦興禪寺に秘蔵いたしました。

さて、火葬場のすぐ隣の興禪寺に、いつまでも隠匿しておくわけにゆかない。いつ發覚して持ち去られ、いかなる処罰にあうかしれない。

そこで三文字士は松井氏や林逸郎氏、飛田、市川等の人々と七士の遺族の人々が、極秘のうちに相談した結果、遺骨を熱海の松井家にうつし、更に「興亞觀音」にうつすことになりました。

昭和二十四年五月三日の午後、広田弘毅の令息、東条未亡人、武藤未亡人、それから三文字士等が興亞觀音を訪れ、堂守として妙法をもつて専心に英靈の供養回向を申し上げていた私ども夫婦に、『知り合いの、ある人の遺骨ですが、時機のくるまで、誰にもわからぬように、秘蔵して置いて貰い

たい』と申し出られた。

私は一見して七士の遺骨であると直感して快く承諾した。

それからが、まことに大変であった。私ども夫妻は子供達にも知られぬように、深夜、本修院の玄関口の題目塔のうしろに、ひそかに穴をほり、埋めかくした。そしてわざわざ雑草をしげらし、誰がみても絶対に察知されない自然の形にした。

ところが、次々に種々の流言蜚語があり、絶対大丈夫と確信していても、私ども夫妻は何となく不安になつてくる。そこで埋蔵の場所をかえる。ある時は、興亜観音像の裏に、またある時は本堂にと、いつも、子供達にも知られないようによと、真夜中での作業でありました。

◆殉国七士の御遺骨が三ヶ所になつたわけ

昭和廿六年九月八日午前十一時四十四分、講和条約はサンフランシスコで調印され、条約の発効は、翌廿七年の四月廿八日からではあるが、廿六年九月八日の調印以後は、米軍の日本取締りは、非常にゆるめられてしまつた。

そして七士の遺骨の持ち出しの祕話や、またその遺骨が興亜観音の境内に埋蔵されていることなども、新聞にぼつぼつ報道されるようになり興亜観音に七士の遺骨をとむらう人も多くなりました。

長野県上水内郡長沼の前島定照氏は、僧籍にはいつていられるが、もともと林檎園主で、この人が、戦争の責任を一身に負つて刑死したこと同情し、その靈を供養するべく、昭和廿七年五月一「十二日、自家の庭先に建碑し、そのもとに一握の遺骨を埋葬されたそうですが、その遺骨はどこから入手せられたか知りませんが、興亜観音の御遺骨とは何等の関係がありません。

さらにまた、昭和三十五年八月十六日には、愛知県憐豆郡の三ヶ根山に「殉国七士墓」が建立せられて、盛大に墓前祭がおこなわれた。そこに埋葬された遺骨は、明かにこの興亜観音にある骨壺から香盒こうごく一ヶ分ほどを分骨したものであり、三文字氏、林逸郎氏等の発起されたものであります。

この興亜観音にある「七士之碑」は、昭和三十四年四月十九日に建立されたもので、碑の文字は、

元総理・吉田茂氏の筆になるものです。

この建碑のおこりは、松井大将の無一の親友であつた高木睦郎氏（興亜觀音奉讚会長）の發起によるもので、高木氏は東亜同文書院出身の実業家で支那大陸で活躍された方であり、吉田茂元総理とも親交があつたので、碑文も高木氏の依頼で吉田氏の揮毫となつた次第です。

碑文についても種々議論があつたそうですが、『知る人ぞ知る「七士之碑」でいいではないか』との結論に落ち着いたそうです。

◆日本の運命と日華事変ならびに大東亜戦争

東京裁判は、大東亜戦争は日本の侵略戦争であり、A級の戦犯の七士は、その元凶であると判決をくだした。米英等の連合国が、復讐を目的としてやつた東京裁判の判決は毫も七士の人格を傷けるものではない。

そもそも大東亜戦争が侵略戦争であるか、どうかは、後世の……百年二百年後の史家が公正なる結論をくだすことでしょう。

ただ絶対に間違いなく言えることは、日清戦争から日露戦争、満州事変、日華事変、大東亜戦争という、明治維新より以後の日本の「あゆみ」は日本の運命であったということです。

明治以後の日本は、二つの国是（國家運営の方針）を一貫して確立して来ました。

第一は日本の独立主権の確保であります。ペルリが日本の門を叩いてより以後、日本がいかに白人国家より、治外法権等により半植民地的に主権が侵害せられたか、日本は完全独立国家足るべく、日清戦争と日露戦争は自衛のために、やむことを得ずしておきたのは、歴史がおのづから証明している。

第二は東亜民族の独立と、白人侵略の撤廃であります。日本が三百年の鎖国のねむりより覚めた時は、東亜諸民族はもとより、世界の有色民族はすべて白人国家の侵略と搾取の牢獄の中に投げこまれていた日本の独立を確保するためには、地理的な条件から、ソ連の南下する勢力を排除せねばならないのは、当然のことで、ここに日露戦争や満州事変がおき、ソ連国境に日本の生命線をしいたわけです。

それが不都合だというなら、今日の米国が自国の防波堤を日本列島・南朝鮮・沖縄・台湾・ベトナムにおくのも、また不都合であり、ソ連がその生命線をハンガリー、ルーマニア、東独、ブルガリヤ、ポーランド、チエコ等に置くのも不都合となる。

大東亜共栄圏の理想は、東亜諸民族の民族自決を主体としたもので、白人國家の支配と搾取を東亜の天地から追放することが目的であった。

それは明治維新より以来の日本の使命（日本以外にどの民族も国家もやり得ない）であった。その使命感と理念のもとに日華事変と大東亜戦争がおきた。

ただ、極めて遺憾であり、厳粛に反省しなければならないことは、日華事変において日本は種々の過誤をおかしたことであった。日支両国が共存共栄をもとめて闘うという矛盾であった。忍耐づよく日本は中華に有色民族の团结を説くべきであった。同文同種の同和をはかるべきであった。

白色人種を排除するため、黄色の同盟に日本は菩薩の如き大慈悲、大忍辱、大精進に住すべきであった。

それが戦火の元に相闘つたのだから、洗濯を泥水でしたようなものでした。何という矛盾、何という悲劇でしようか。日本と中華の双方に誤解がありましたが、国力と文化において、優秀であった日本が責を負うべきでしょう。

その日華事変が未解決のまま、（否、その解決のために）日本は大東亜戦争に突入してしまった。そして昭和二十年八月十五日、完全なる敗北をもつて戦火は終了した。

米英は東京裁判において、日本を侵略者と烙印をおした。だが、勝てば官軍、敗れば賊軍であった。日本は平和と人道に背き、国際正義を踏みにじった犯罪者として處断された。

日本のやつたことが侵略なら、日ソ中立条約を一方的に破棄して満州になだれ込み、一切の設備を掠奪し去つたソ連の行動は、どうだ。

米国日本の都市の無差別爆撃はどうだ。一瞬にして数万の非戦闘員の生靈をうばつた原爆の使用は人道的なのか、さらに、十八世紀以降のアジアやアフリカに対する西欧帝国主義の掠奪・弾壓・搾取・支配は侵略ではないのか。

有色民族のなかで、この白人民族、西欧帝国主義に堂々と正面から蹶起して「まつた」をかけたのは、明治以後の日本だけなのである。東亜共栄圏の理想は、文化地政学から考へても、人道倫理から考へても、決して間違いではない。中華事変と大東亜戦争はその「生みの苦しみ」であった。

興亜観音の創立者たる松井石根大将の「大アジア主義」は、不思議にも大東亜戦によつて第一歩をすすめました。戦後、続々と独立を達成したアジアの諸国、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマ連邦、マレー・シア連邦、インド、これらはみな大東亜戦の結果ではないでしょうか。結果からいえば、日本は「敗戦」という犠牲において、東亜諸民族の独立をもたらしたものでした。

菩薩は自己犠牲において衆生を救済すると同じように……。

殉國七士、もつて瞑すべし。殉國七士と同じ運命をたどり、戦犯として処刑された幾百千の靈もまた瞑すべし。日華事変・大東亜戦による二百萬の戦士・戦災死の靈もまた瞑すべし。かく冥福をいのるとともに、今日ならびに今日以降の日本人は東亜の諸民族の独立と共栄のために、至誠をつくす事が、彼我の戦没英靈・戦争犠牲者に対しての最高の回向供養になると存じます。

*七士の辞世の句と遺言

◇武藤 章 氏

霜の夜を思ひきつたる門出かな

◇東條 英機 氏

我れゆくも またこの土地に かへり来ん

◇土肥原 賢二 氏

国に酬ゆる ことのたらねば

踏み出せば せまくも広く 変るなり

◇板垣 征四郎 氏

一河白道も かくやあらなん

がうと、我骸を永遠の平和のために捨てること糞土をもつて黄金にかえるものである。どうか我国が速やかに列国と平和を講じてその再建を全し、

世界の平和に貢献せんことを念願する。とこしへに わがくに護る 神々
の御あとしたひて われは逝くなり

◇木村 兵太郎 氏
今回のことは因縁とあきらむべし。自分は永遠の平和のため一礎石として
喜んで大往生をとげる。(夫人宛)

◇広田 弘毅 氏
黙々として死につく。自然に生きて、自然に死ぬ。

天地も人もうらみず一筋に無畏を念いて安らげくゆく。世の人に残さやば
と思う言の葉は自他平等に誠の心

◆本修院道場の信仰修業

興亞観音の住職の住居を本修院道場としています。この道場では一切の雑乱勧請を排しまして、
日蓮聖人のご教示のまま、純正に御本尊をおまつりしてあります。

御本尊は日蓮聖人御真筆の「大曼荼羅」を写真復元し、それを当院の正境宝殿に合うように縮写し、
かつまた日蓮聖人の御聖容は、最も信頼するにたる六老僧の日興師の「北山本門寺聖像」を拝影して、
御奉安いたしております。

よく日蓮宗の寺院教会道場などで、稻荷・帝釋をはじめとし、大黒天・鬼子母神その他の神々、畜類
などを雜濫勧請して「御利益」等を祈るところがありますが、我が道場は、そのような日蓮聖人の御遺
文にもとる一切の迷信は、謗法罪として厳誠し。ただただ日蓮聖人のお言葉のままに、「正方・正信」
にはげんでいます。このような信仰にこそ諸天善神の御加護のある事を確信しています。

○交通

東海道線熱海駅下車 駅前よりバスにて九番線の「湯河原駅行」「伊豆山行」にても可、
湯河原駅行は「興亞観音前」にて下車。徒歩十分 注、「伊豆山行」は徒歩約二十分

写真右は本修院道場で、左は興亞觀音への參道です どうぞ參拝の各位には道場にお立ち寄りください。

◆正しい信仰について

私ならびに家族は不思議な因縁で、興亞觀音の住職を奉行させていただいています。

私の信仰は日蓮聖人の宗教で、妙法五字七字もって、この興亞觀音におまつりしてある英靈各位に、日夜、回向の至誠をささげて、世界の平和を祈念いたして居ります。

日蓮聖人の宗教は、一言にして申しますと、立正安國のなかに、立正安身と立正安家をもとめる宗教であります。

世間にはお題目を唱える種々の宗教団体がありますが、その多くは、個人の現世利益のみを求めるごとに終始しています。勿論、ご利益はありますが、個々の人々の現世利益が、日蓮聖人の宗教の本筋ではありません。

『それ國は法に依つて、而して昌へ、法は人に因つて、而して貴し。國滅び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法をば誰か信ずべけんや。先づ國家を祈つて、須く佛法を立つべし』

『國を失ひ家を滅ぼさば、何の処にか世を遁れん 汝須く一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を祈るべきものか』

『國に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん』
と「立正安國論」の中で申されてあります。

その「正」とは、世間の倫理道德よりも、もっと深い、宇宙を一貫する眞理正法（即ち妙法五字七字）のこととで、それをば日本国家に建設実現するために、信行にいそしむなかに、祈らずとも、その信行者の個人と家庭とに佛天のご利益はあるのであります。

既成宗門は葬式佛教となり、新興宗教は現世利益に専心しています。葬式も必要であり、法要も必要であり、ご利益や祈禱も必要でありましょうが、それにもまして「立正安國」が必要でござります。私は日蓮聖人の御遺文の御示教のままに信行にはげみ、戦没英靈に御回向をしています。